

■武蔵石壽 旗本引退後、博物学の才能を開花させ、博物学史上特筆される貝類図鑑「目八譜」を遺した“晩成の学者”。

むさしせきじゅ  
忠臣蔵大当り1766＝ 武蔵国(現在の東京都新宿区砂土原町)で、旗本武蔵十郎衛門義陳の長男に生まれる。幼名は釜次郎、後に孫左衛門と改める。名は吉恵。号は石寿、翫珂亭。

・ ・ ・ ・ ・ 1770＝ 4歳：生涯を奇石の蒐集にかけ、弄石ブームを起し、厳密な研究態度は近代考古学を先駆した木内石亭が、同好の志と{弄石社}を組織、{奇石会}を開いて、蒐集したものを整理分析することに専念し、

田沼意次老中1772＝ 6歳：  
大原騒動・ ・ 1773＝ 7歳：「雲根志」前編を刊行した木内石亭のように、商人ながら、博物学者のような異色の人物も登場するが、

黄表紙始・ ・ 1775＝ 9歳：  
8代将軍吉宗が、幕府財政を立て直すべく、全国の大名に“天然資源など産物の調査”と“絵図の提出”を命じたのを契機に、徳川時代も半ばを過ぎて、自ら行政しなくなって暇を持て余していた大名たちの博物学への興味が始まり、藩政改革を成した熊本藩6代藩主細川重貴は参勤交代の途次、見たことのない植物を採集して押葉帖にしたり、蝶が卵から羽化するまでを記した「昆虫胷化図」を著したり、高松藩5代藩主松平頼恭が、この頃、鳥類を実物そのままに詳細に描いた「衆禽画譜」を作らせ、幕府に献上された「衆鱗手鑑」では、さらに海水魚を立体的に描くなどし、博物大名の間で、これら図譜を貸し借りし模写しあうようになるなどネットワークを形成し、博物大名が次々生まれて行くような時代のなか、  
蘭学階梯・ ・ 1783＝17歳：この頃から神代石(考古学遺物)が全国的に流行し始めるが、木内石亭は、自らの奇石に対する考えとは異なるものの対応して、華々しい老後を迎えている。

意知刺殺事件1784＝18歳：  
田沼意次失脚1786＝20歳：  
寛政改革始・ 1787＝21歳：寛政の改革を始めた老中松平定信に引き立てられた堀田正敦が、

異学の禁・ ・ 1790＝24歳：若年寄に拔擢された年、家督を継いで、250石扶持の旗本となり、

松平定信引退1793＝27歳：  
オランダ正月・ 1794＝28歳：堀田正敦が、江戸時代随一の大本草学者小野蘭山をブレインに、鳥類図鑑「堀田禽譜」を一旦完成、

膝栗毛始・ ・ 1802＝36歳：  
アメリカ船来航始1803＝37歳：木内石亭が、神代石の成果を「雲根志」第三編にまとめている。

・ ・ ・ ・ ・ 1810＝44歳：この年、小野蘭山は死去するが、  
ゴッホの拿捕 1811＝45歳：

水野忠成老中1818＝52歳：  
・ ・ ・ ・ ・ 1820＝54歳：  
甲府勤番などを務めた後、時代の影響もあって、趣味とする博物学をやりたいと、  
異国船打払令1825＝59歳：\*還暦を迎えるや引退し、戸山ヶ原で研究に没頭し始め、  
シボム追放・ 1829＝63歳：  
富籤流行・ ・ 1830＝64歳：まず、当時盛んであった舶来の鳥を飼うのに対応するように、「風鳥韻呼類」を著し、  
富籤三十六景1831＝65歳：この年、若年寄堀田正敦が、質量ともに江戸時代を代表するものであるとともに、当時の学問水準の高さを今に伝える「禽譜」を完成させ、幕府に献上したこともあって、  
滑稽+人情本 1835＝69歳：この頃には、博物学も広く一般に知られてブームになっており、故人の小野蘭山を行司役にした「愛物産家番付」なるものが発行されているが、最高位の東の大関には、この年富山藩藩主になった前田利保が、西の大関には、すでに蘭癖大名として広く知られていた福岡藩藩主黒田斉清が挙げられ、前頭には、江戸の旗本を中心に、裕福な商人たちも名を連ねており、  
・ ・ ・ ・ ・ 1836＝70歳：その\*前田利保を中心に、黒田斉清ら藩主や旗本を中心メンバーとする本草研究会{楮鞭会}が発足すると、主要メンバーとなって、前田利保とともに博物学の発展に貢献するとともに、いよいよ本領を発揮、

大塩平八郎乱1837＝71歳：  
適塾+ブン・ 1838＝72歳：  
会の名は古代中国の医薬の神、神農が諸い鞭で草木を打ち、その汁を嘗めて薬を定めたという故事に因んで名付けられたもので、薬種商の大坂屋四郎兵衛など、その他の身分の者も参加している。すなわち、蒐集編集すること自体が目的になり、身分を超えて、情報を共有するようになる、現代のインターネットに対応するようなものと言えよう。牧野富太郎はこの{楮鞭会}に憧れ、会則をしっかりと書き写しているが、それによれば、'物品を分析してその真贋を極め人体に有効か否かも明らかにして民を救う'を目的に、鳥獸蟲魚甲介。種物、金石、生草木、人類水火土、草木、服器を扱うものであったが、貝の造形に魅せられ、自らは、'要不急の学'と呼び、'有用無用を超越して自らの楽しみのためにやる'、あるいは、'本草学のような人体に有効かどうかということに興味は無く、貝だけが持つ造化の妙に惹かれた'と語っているように、実用性にとらわれず、純粋な知的探求心に基づく学問の姿勢で取り組み、  
順天堂始・ ・ 1843＝77歳：\*私財を投じて、遂に15巻13冊からなる大作「目八譜」を完成。目八譜は、991種の貝を収録した図鑑で、図は服部雪斎が描いた図に、当時の貝類書と丹念に照らし合わせて解説している。書名は、富山藩主前田利保が付けたもので、序文に目八とは岡目八目にあやかり、貝の字を分けると目と八になることから付けたとある。現在の日本の貝の和名150は、この図鑑で命名されたものである。日本の博物学史上でも白眉と言えるこの図鑑は、当時世界的に見ても非常に優れたもので、その成果を見ると、日本の博物学の中で貝類学が突出していたといえるので、堀田正敦の「禽譜」を継ぎ、それを超えるものでもあった。

・ ・ ・ ・ ・ 1847＝81歳：  
遣欧使節・ ・ 1861＝95歳：知的好奇心と自然への深い愛に満ちた生涯を全うして、没した。  
石寿の研究は多岐にわたるが、竹の美と哲学を記録した図譜「竹譜」のみ、国立国会図書館に写本が現存。また東京大学農学部にある昆虫標本は石寿が制作したものである。

Wikipedia「武蔵石壽」をベースに、Copilotで追補、NHK{英雄たちの選択}の「時代を開いた博物大名たち」により大幅追補、